



第14代 板橋区医師会 会長
共助会医院

堀内健二郎
Kenjiro Horiuchi

■ 医師会の役員として取り組まれたことはどのようなことでしょうか？

平成元年に、板橋区医師会病院の8階に「板橋区おとしより地域医療センター」を開設しました。これは、来たるべき高齢社会を見据えて訪問診療や電話相談をはじめ、介護する側のレスパイトも考慮したショートステイなど、東京都内でも初の取り組みであり全国各地から多くの方々が見学に訪れました。都市部において在宅ケアを必要とする高齢者の増加が見込まれることから当時の石塚板橋区長のご理解をいただき、板橋区の委託事業として行ったものです。

ふりかえれば、これは地域包括ケアシステムに先駆けた事業であり、現在でも形を変えて各種の区の事業として継続されています。

■ 平成3年には、板橋区におとしより保健福祉センターがつけられたのですよね？

私は当時から介護と治療を合わせたケアキュアセンター構想が必要だと考えていま

した。先ほどもお話ししたように、当医師会では早い時期から行政との様々な連携が始まっていました。平成4年に板橋区医師会訪問看護ステーション設立準備委員会と、実務的な作業を担当する在宅委員会を設置し、検討に入りました。地域での医療連携にも力を入れました。

そもそも板橋区には医師会病院という基盤があり、大学病院や都立病院をはじめ医療機関も多く環境に恵まれているほか、行政との協力態勢が早くから確立している地域でした。行政と連携して在宅医療へ取り組む姿勢は、板橋区医師会としての一つの方向性を示せたと考えています。

■ 産業保健の推進に力を注がれたそうですが…。

厚生省が産業保健の拡充を図っていた時代背景もあり、平成8年に板橋区医師会館に「東京城北地域産業保健センター」が設立されました。ここでは、練馬・豊島・板橋区の医師会が力を合わせ小規模事業所

の労働者の健康を守るため、産業医として専門的な立場から指導や助言を行ってきました。

対象企業は従業員数が50人未満の小規模事業所で、衛生管理者が配置されている大手企業と違い、定期健康診断すらも行われていない事業場が少なくなかった時代です。

■当時、産業医としてのご苦労は？

私が担当していたのは洗浄作業に有機溶剤を使っている企業でした。職場巡視を行い、事故を起こさないよう適切な指導を続け職場環境の改善に取り組みました。

職場の作業管理が徹底されていない企業も多く、従業員の健康被害を防ぐために助言をしても、なかなか対応してくれないケースも…。そのような場合は「何か起きてからでは遅い」と経営者を説得することもありました。

■医師会病院に対する思いは？

板橋区医師会の歩みをふり返ってみると発展の原点は板橋区医師会病院の設立にあると思います。これまで歴代の執行部は常に時代のニーズに対応してきました。地域住民の保健、医療、福祉、介護にかかわる各種事業を行政との密接なる連携のもとに推展開してきました。その拠点となったのが板橋区医師会病院です。

■現在、幸せを感じられることは？

昔から続けている陶芸を今も楽しんでいきます。医師会の小会議室にある花瓶は陶芸を習いはじめたころ、手びねりで作ったものです。

現在にいたるまで、地域で長い間、診療を続けてきましたので、地元のみなさんの

成長を見守ることができるのも幸せですね。子どもだった患者さんが社会人になった姿を見せてくれたり、また、そのお子さんと会えたり。地域と関わってきたからこそ喜びだと思っています。

■これからの医師会へ期待することは？

これからも会員のみなさんのために、様々な事業に対する支援や生涯学習への配慮を続け、近隣会員との親睦を深める企画や、スポーツ・趣味による会などを積極的に開催し、情報交換の場を拡げていただきたいですね。事務局においては、多岐にわたる業務は昔日の比ではなく、ご苦労をかけます。

■会員の先生にメッセージをお願いします。

ぜひ支部会に参加してください。最新の治療法や、診療報酬など、有意義な話を聞くことができますし、地域の医師とのつながりを深めるきっかけにもなります。そして、医師として弱者への思いやりの気持ちを持ちつづけ、生涯学習を忘れずに。

また、何事にも健康第一です。ちなみに私の健康の秘訣はよく食べてよく眠ること、美味しいお酒をいただくことです。今でも晩酌はかかせません。会員の先生方もご自身の健康に十分にお気をつけください。





第15代 板橋区医師会 会長
今本クリニック

今本喜久男
Kikuo Imamoto

■ どのようなことがきっかけで医師を目指すようになったのでしょうか？

私が旧制中学4年のころは、戦争が最も激しい時でした。私は16歳のときに海軍甲種飛行予科練習生として航空隊に入りましたが、学業半ばで飛び込んだ航空隊では、今日もまた無事であったかと思うその日その日の命でありました。

日章旗うずめし朝はまぼろしか
金沢駅にひとりかえりぬ

戦争が終わり、美幌海軍航空隊から金沢駅に悄然と降り立ったときを思い浮かべ、後日詠んだものです。

私は戦後に復学しましたが、クラスには一つ二つ下の学年にいた生徒ばかりで真剣に語り合える友達もいませんでした。戦争から戻った後は、何か大きなものが遠くへ去っていったような喪失感におそわれ、何の希望も湧いてきませんでした。内科医

だった兄が「東京へ出て来い」と誘ってくれ、医師を目指すようになったのです。

■ 医師会で力を入れられたことは？

当時も相次いで打ち出されてくる医療制度の改革に、私たちは翻弄されていました。当時は医師会病院の経営をはじめ、様々な問題に直面していました。難しい課題も多々ありましたが、私が目標に掲げたことは医師会病院の活性化と、職員の意識改革でした。医師会病院がさらに発展するよう幹部との話し合いを重ねました。自ら動き革新を目指していましたが、当時、支えてくださった周囲の方々には本当に感謝しております。

■ 訪問看護ステーションを設立されたのですね。

堀内会長時代、平成7年に板橋区医師会訪問看護ステーション、私が会長の平成8年に板橋区医師会病院訪問看護ステーション、青木会長時代に板橋区医師会サニシティ訪問看護ステーションが設立されまし

た。全部で3カ所、介護保険制度が始まる前の話です。

介護保険制度が平成12年に導入された際、在宅ケアについては、すでに全国に先駆けて堀内先生を先頭に熱心に取り組みでいらっしやっただので、施行されたときは板橋区が在宅ケアのモデル地域とも言われました。これは堀内先生のご功績だと感謝しております。

■東板橋医師会との統合にもご尽力されたとうかがっていますが…。

一つの自治体の中に、いつまでも二つの医師会が相対するように存在する不自然な状況は、もはや時代に合わないものであり、お互いが統合に向けて協調と努力を重ねながら、横たわっている諸問題を解決してきました。もとはと言えば同じ板橋区医師会会員同士、話せばわかると思っていました。最初に話し合いをしたときから「やりましょう！」と力強く握手を交わすことができましたので「これはなんとか統合を成し遂げなければ」と心に誓った次第です。

友情と信頼が生まれるのも早く、互いに十分な連絡を取り合い理解を深めながら、何の抵抗もなくスムーズに一緒になることができました。



■患者さんと接するとき心がけていることは？

患者さんは常に弱者であります。どのような職業でもそうですが、弱い方々に思いやりを持って接することが大切だと思っています。

■これからの医師会に期待することは？

顧みると歴代の執行部は、一人でも多くの会員と共に考え議論を深めてつねに正論を主張し、配慮のあるリーダーシップを発揮してきました。そしてそれぞれ充分にその責任を果たし、今日あるようなぶれることのない確固とした医師会を築き上げています。現在も日本医師会や都医師会や本会の各分野で活躍する多士済済の人材には、目を見張るものがあります。板橋区医師会の誇るべき財産であると思います。

■会員の先生へメッセージをお願いします。

少子高齢化が進み、経済低迷の環境のなかで、これからの介護保険制度はどうなっていくのか、医療保険との役割分担はどうなるのか、そして保険、医療、福祉の新しいシステムを築き上げていく上で行政との連携がますます重要になります。現状のように限られた役員だけでは、山積する医師会の課題に積極的に取り組んでいくのは困難になっています。会員全員の協力が不可欠であることを、ここにあらためて強調しておきたいと思います。よろしくお願いいたします。



第16代 板橋区医師会 会長
青木小児科医院

青木 恒春
Tsuneharu Aoki

■ 東板橋医師会との統合にご尽力されたとうかがっておりますが、そのときのお話をお聞かせください。

当時、板橋区の医師会は二つに分かれており、行政からは健診や学校医等の事業も関係するため元通り一つの会になってほしいという意向も出ていました。私は以前から東板橋の会員の方々と野球やゴルフで交友があったので「こうしてスポーツを一緒に楽しむ仲なのに、いつまでも分かれていることはない」と感じていたのです。

そこで、東板橋の幹部の方に「将来の医師会について話をしませんか」と持ちかけ情報交換を続けたところ、先方も統合に向けて同じ気持ちだとわかりました。

私が会長に就任したときも、相変わらず先方の会員と親睦を深めていましたので、今本会長時代からの流れもあり統合までスムーズに進めることができました。平成9年7月1日には私共の永年の念願であった東板橋医師会との統合が成立し、このこと

は両会会員にとって、誠によるこばしいことと思います。みなさんがよいタイミングで適切な決断をしてくれたおかげです。私は人が好きですし、誰とでも分け隔てなく接してきたので、好意が好意を呼んだのかもしれない。

■ 先生と医師会病院のそもそもの関わりは？

医師会病院は昭和41年に現在の医師会館がある大和町に、都内唯一の50床の開放型内科系病院として誕生しました。昭和47年11月に今の高島平に移転し100床の総合病院としてオープンしました。私が理事になったのは高島平に移転して4カ月目で、新設された病院部の初の部長理事という要職を命じられたのです。医師会病院の院長には私が学生時代にお世話になった永田正夫教授が就任しておられました。挨拶にうかがうと「よう青木君、しばらく」と言われ、何となくほっとした気持ちになりました。また、医師はほとんどが私の後輩で、何かと快く協力してくれたことで大変助けられ

ました。診療委員会を立ち上げて、医師以外の経理課長、医事課長、検査科長、薬剤科長、看護婦長等の直接診療にかかわる職員と月1回話し合いを始め、部署毎に様々な実情と要望が聞けるようになりました。

現在は、大学の後輩でもある泉裕之先生が院長として活躍しています。

■ 検診への取り組みは？

当会には医師会病院があるという強みを生かし、私が理事をしていた昭和55年当時、板橋区の助役をしていた石塚輝雄氏（後の区長）に話をし、衛生部長、教育長、学務課長等と度々話し合いを行い、消化器検診、腎臓検診、心臓検診、側弯検診、貧血検診等々を医師会で引き受けることにしました。医師会の優秀な先生方が各検診班をお作りになり、班長になってくださいましたが、他の区と異なっただのは、医師会病院が非常に大きな戦力となったことです。そのためか医師会では、講習会、勉強会が各専門毎に数多く開かれるようになり、それが先生方の努力で、年1回学会を開くまでになりました。これが我ら板橋区医師会の誇りであり先生方に敬意を表するものです。

また、これらの取り組みは、その後平成10年の板橋区医師会病院健診保健センター（現 健診センター）設置につながりました。

■ 板橋区の感染症定点観測調査事業が成功した経緯を教えてください。

昭和55年本事業発足当時、東京都では各区1カ所に定点を置いて感染症の患者を報告していました。これをぜひとも板橋区

内で実践したいと、小児科を中心に親しい先生10人をお願いすると、すぐに賛同していただきました。あとは満遍なく定点が置かれるよう医療機関を選び、お願いしたところ、お一人も断わらず引き受けてくださることに感動しました。

こうして30定点が決まり、先生方が真剣に取り組んでくださったおかげで、どの地区でどの病気が流行っているのか、傾向の特徴を得た正確なデータがとれるようになりました。流行傾向がわかるので診察にも役立ち、区民のみなさんにいち早く感染症の情報提供を行い予防につながれるようになりました。この定点観測は、後に区によって事業化され、現在も36の定点で観測が続けられています。

なかなかうまくいかない区があるなかで当会が成し遂げられたのは、私の提案を上司が理解し背中を押してくれたことや周囲のご協力のおかげです。区民の健康を守るという“医師会のあり方”が、自然と会員のみなさんへ伝わっている証だと思えます。

■ 会員の先生へメッセージをお願いします。

みなさんの普段からの協力に心から感謝しています。板橋区には大きな医療機関も

あり医療環境に恵まれている土地ですから、それを生かして今まで通り、区民のため、ひとり一人、責任を持って活動を持ってください。





第17代 板橋区医師会 会長
野口医院

野口 晟
Akira Noguchi

■ 会長時代のお話を聞かせてください。

平成11年の会長就任時、それは生やさしいことではありませんでした。もとより学術講演会でお目にかかる以外、医師会の先生方とは四倉健守先生、川畑喜積先生達と自動車部であちこち旅をした程度でしたから、会長に推挙されたときは驚きました。幾度もご辞退申し上げた後、決意しました。

就任後、板橋区長はじめ三役の方から激励のお言葉を頂戴しました。責任の重大さに身がひきしまる思いでした。常に熟慮に熟慮を重ね、副会長はじめ多くの有能で積極的行動力を持つ理事と共に、あるときは深夜まで皆で協議し、任務を果たしてまいりました。諸先生方に厚くお礼申し上げます。また、事務局の皆さんの細やかな努力にも心から感謝します。

板橋区と板橋区医師会との関わりにも心を込めて接することにより、信頼の絆を深めてまいりました。(当時の板橋区長より、私宛に表彰状をいただきましたが皆様のお

かげと存じます。) また、当時の副会長の今村聡先生は、診療の傍ら現在は日本医師会の副会長を務めておられ、そのお人柄を發揮されておられるご様子です。

■ 先生が一番力を注がれたことは？

最も力を入れたのは医学会の開催です。当時、江戸川区医師会が熱心に医学会を開催しているのをうらやましく思っていました。当会では、今は亡き玉置健英先生や当時の林滋副会長、今本会長のお力を借りて医学会を発足させ、取り組んできました。

今や“板橋区医師会の医学会は全国一”と言っても過言ではないでしょう。また、開かれた医師会を目指して、医学会演題発表においては会員に限らず、区内大学病院、公立病院、歯科医師会、薬剤師会、柔道整復師会、看護職・介護職などの参加も求め、公開講座には一般区民も参加できるようにし、この取り組みは現在も続いています。年々発表も増加、内容も充実し、集談会の頃とは比較にならない大規模な会に発

展しました。また、医学会には英語の論文が投稿されることを期待しています。

■板橋心臓病研究会にも力を注がれていたとおうかがいしていますが…

松村敬徳先生が中心となって板橋心臓病研究会を立ち上げたとき、私はまだ会員になったばかりでしたが、心電図を持ちよって読影するなど専門知識を独占せず広く共有しようというすばらしい取り組みだったので、継続させたいと、微力ながらお手伝いいたしました。勉強会に参加できなかった先生方のために、毎号の板橋区医師会通報にも勉強会の内容を掲載させていただきました。心臓病研究会では本当に多くのことを勉強させていただきました。

■当時は文化講演会やダンスパーティーも開催されていたそうですね。

文化講演会はさまざまな業界から講師をお呼びし、政治ジャーナリストの櫻井よしこさんや、将棋界から米長邦雄氏などを講師としてお迎えし、盛会に行われました。

会員みなさんには勉強だけではなく、楽しみを通して親睦を深めてもらおうと、生バンドの演奏でダンスパーティーを開催し多くの方に喜んでいただきました。

■医師を目指すきっかけは？

学生のころ結核にかかり大変苦しんだ経験から「医師になって結核の人を助けたい」と思い、人工気胸療法を続けながら「絶対に医師になる」と強い意思を持ち、周囲の方々の助けもあり医学部へ進むことができました。当時は優秀な方々が結核で亡くなるなか、結核が治り私が医師になれたのは奇跡であり、あきらめず努力すれば必ず道

は開けると身を持って経験しました。

■趣味は音楽とのことですが……

特にクラシックが好きで心が癒されます。BGMを流す病院などまだなかった時代でしたので、当院でクラシックを流すことは世間的に見ても大変珍しい試みだったと思いますが、多くの患者さんに喜んでいただくことができました。

ある患者さんから「音楽でも気持ちが楽になりました。」とお礼を言われたときは、実にうれしかったことを覚えています。好きなクラシックを流しながら、そのなかで仕事ができ、私自身も幸せでした。

■これからの医師会に期待すること、更に会員の先生へメッセージをお願いします。

医師として、社会に貢献する道を選んだことを思うとき、私のなすべきことは、病める人、また病める社会に及ばずながら力を尽くすことと考えました。

板橋区医師会は勉強熱心な会員が多いと感じています。今後も更に会員を刺激するような勉強会を継続していただけるとありがたいです。みなさんには、医師会の伝統を守りながら、さらなる飛躍のためにお力添えをお願いいたします。また、会員の先生方の個性を受け止めつつ、そつのない多種の業務に心を込めてくださっている役員の方々に感謝と声援を送ります。

